

神様お願い

今日 あした

前回のあらすじ

山口あゆみは、六十二歳。ずっと独身で実家に暮らしていたが、昨年、母が亡くなり、兄と二人で財産を相続した。あゆみは今住んでいる、母屋の隣にある離れだけ残して、残りの土地を売ったので、ちよつとした金満家になった。

そこに、母の知り合いの紙谷しげると名乗る六十過ぎのロマンスグレーの紳士がお悔やみにやって来る。あゆみは心をときめかす。その後、紙谷の知り合いと名乗る人から次々に寄付を募る電話がかかり始める。

神様お願い (二)

母が亡くなって一年が過ぎ、墓のある青山墓地で一年祭をする事になった。八月の暑い日だった。仏教などの一周忌は、亡くなってから一年にならないうちにするのが、神道は一年が過ぎてから一年祭と称して、神主に墓に出向いてもらい祝詞をあげてもらう。

身内だけの式は出席者も少なく、兄の雄大と、その妻の桃子さんと二人の息子、それに独身のあゆみの五人だけ。式典の後、神主も加わって、雄大があらかじめ予約しておいた、お墓から歩いて行ける青山のインド料理店に、腰を落ち着けた。

あゆみは、暑い盛りとはいうものの、カレーが主菜のインド料理では一年祭の式典にはふさわしくないような気がしてそつと神主を盗み見た。すると彼は、兄や桃子さんを相手に、ナンの講釈を始めた。思わず吹き出しそうになってよく見ると三、四十代で

「神主さんは、神社の二代目さんですか」と気さくに質問する桃子さんに、「普段は高校の教師をしています、資格をとりまして、学校が休みの時には時々アルバイトで神主をしています」こちらもあつげらかんと答えていた。

「今は、何でもありませんだ！」
あゆみは、ずっと祖父母や親たちの側にいたせいか、自分が古臭く、時代遅れのように感じた。

家に帰って仏壇にお灯明をあげ、柏手を打って「一年祭が無事終わりました。精進落としてはインド料理だったのよ」と報告。母はびっくりしているだろうな

……。

居間に戻ってテレビのスイッチを入れると、横のサイドボードの上に置いてある神棚が目に入った。

「神様、ただ今帰りました。久しぶりに出かけたから、今日は電話のことを忘れていられたわ」

一人暮らしになってから、神棚に向かってひとり言をいうのが癖になっている。相変わらず、毎日のように寄付を募る電話や、山林を買わないか、などと奇想天外な電話が掛かって来て……。掛かって来ない日でもいつも電話のことばかり気になって、大好きな推理小説すら集中できないでいる。電話ノイローゼ気味なのだ。

あゆみは自分のことを朝型人間だと思っている。目覚ましをかけなくても六時には目が覚める。そこでぐずぐずなんかしていないで、さっさと起きてしまう。せつかちなのだ。起き抜けにトイレと玄関、雨が降らない限り、道路から庭まで掃除をしてしまう。

そこまで終わらないうちは落ち着かない。もう二十代の終わりに父が寝たきりになった時からの習慣になっている。近頃は、変な電話が掛かって来るせいで、夜眠れなくて嫌な気分をひきずりながら目が覚めても、一連の掃除をしようという気持ちが悪く。今では精神安定剤になっているようだ。

仏壇と神棚にお水をあげてから朝食の準備をする。パンとサラダとヨーグルト、それに紅茶。毎日同じものを、モーニングショーを見ながら食べている。食べ終わると、こっくりするのも毎日の事。目覚めて後片付けが終わると十時頃になる。それも判で押したように毎日同じ。

だが、その日はちよつと違っていた。ジョギングでもしようと思っていたら玄関のチャイムが鳴った。

「はい」、インターホンについているカメラを見たら紙谷さんが写っている。

「以前にお邪魔した紙谷ですが、頼子さんの一周忌の頃だろうと思ひまして、お参りをさせて頂きたくてまいりました」

何で？ 今頃？ あゆみは心臓を打つ音が聞こえる程どぎまぎした。

「はい、只今参ります」

門を開けると、優しい目をした紙谷さんが、感じの良い笑顔で、

「突然お邪魔して、ご迷惑ではないでしょうか」

「いえ、いえ、ぜんぜん、どうぞお入りください。母も喜ぶと思います」

自分の愛想の良さに戸惑いながら、紙谷さんにスリッパをすすめ、家の中に招き入れた。良いのかしら……、どこかでささやく声がする。

紙谷さんは、持って来た百合の花をさしだして

「これを……」もぞもぞ……

「ありがとうございます。母の仏壇にお供えさせて頂きます」

あゆみはそう言って、母の部屋の仏壇の前に案内した。紙谷さんはしばらくの間、仏壇の横に置いてある、母の写真を眺めてから仏壇に向かって長い間合掌していた。あゆみはその間中、斜め後ろに控えながら、紙谷さんの奥床しい品格のある姿に見とれていた。

「どうぞこちらへ」紙谷さんが仏壇の前から立ち上がる気配を察して、あゆみはあわてて立ち上がって、紙谷さんを三部屋しかない家の、居間兼食堂に案内した。

食堂の椅子を引いて「どうぞ」と腰かけてもらい、コーヒーでも淹れようとシンクのある方に向かおうとした時、神様と目が合った。合うわけないけど、神棚に気配を感じたのだった。

そうだ、紙谷さんにはきちんと聞かなくてはいけないことがあるのだわ。

コーヒーをテーブル越しに紙谷さんと自分の前において、あゆみも腰を落ち着けた。

「もう落ちつかれましたか」紙谷さんが言った。

前に彼がお悔やみに来た時、あゆみが大泣きしたことを氣遣っているのだろう。慈愛に満ちた目がそう言っている。

「その節はありがとうございます。先日、一年祭もおわったんですよ」

そこまで言って、どう切り出そう、あゆみは言葉につまっている。

「どうされたのですか、話されたいことがあったらどうぞ仰って下さい」

「あのー、私、今とても困っているのです。毎日のように、色々な被災地で困っている人の為に寄付をして欲しいという電話が掛かって来るのですよ」

「毎日のように……ですか。それはお困りでしょうね。いやー、僕もNPO

法人を通して寄付を募る事はあるけど……ほとんど相手にされないんですよ。お願いする方も、相手の事情もあるので断られて当たり前、くらしいの気持ちでいるのですから、あまり気に病まれない方が良いでしょう」

「あのー、その電話が大抵、紙谷さんご紹介で、というようなことを仰るのです」

「えー……、僕は山口さんを他の人に紹介したことはありませんよ。頼子さん

が御存命中は、もちろん頼子さんの承諾を得てではありませんが、他の人を引き合わせた事はありませんが……、それも、頼子さんにとってプラスになるような方を御紹介したと思いますよ、まったくの好意だけです」

紙谷さんの誠実そうな目が（心外な！）と言っている。

「ごめんなさい。でも、熊本地震災義援金とか、アフリカの子供達の為に寄付を募っている非営利団体とか、そんな電話にいつも紙谷さんのお名前が出てくるんですよ」

「けしからんですね。ボランティアで人助けをしている紙谷しげる、という名前が独り歩きをしているみたいですね。でもあゆみさんは、寄付はされても、騙されたわけではないのでしょうか」

「それが、騙されたのです。お恥ずかしい話ですが、電話があつて寄付をします、という度に、家まで誰かがお金を取りに見えるのです。不審に思つて受取証にある所に電話を試してみたら、全く違うところだったり、名前は合っているけど、自分の団体は振り込みでお願いしているので家に直に取りに行くことはない、と言われたりで、全部詐欺に遭つていたとわかつたんですよ。ひどいでしょう」

「それはひどいな。他人の善意に付け込んで……。それに僕の名前が使われているなんて、徹底的に調べてみますよ」

「そうですね、紙谷さんも被害者ですものね」

二人で顔を見合わせて笑つてしまった。

「そうそう、紙谷さんのお住まいはどちらですか。折角お悔やみを頂いたのにお礼も出来なかつたので、お会いしたら伺いたいと思つていたんですよ」

「礼なんていいですよ。僕は横浜に住んでいます。中華街の近くです」

「まあ、すてきですね。あ、何が素敵なのかわからないけど何となく……」

「あゆみさんは面白い事を言うなー。まじめ一方の方だと思つていました。いつか中華街を案内しますよ。安くてうまい店ならいくらでも知っています。そうだ、来月あたり如何ですか、涼しくなるだろうし、海辺を歩くのにも丁度いい。どうですか？」

「横浜なんて、何年も行っていないから行つて見たいけど、ご迷惑じゃないですか」

「とんでもない、大歓迎ですよ」

こうして九月二十日水曜日に元町中華街の駅で待ち合わせる約束が成立した。

あゆみは完全に恋をしている。紙谷さんが来たあの日の、一挙手一投足まで何度思い出した事だろう。約束の日が来るまで雲の上を歩いている気分だった。派手過ぎず地味過ぎず、と思つて、鏡の前で何日も前から取り換え引きかえ着替えて、結局、白のパンツに紺色のTシャツ、その上からお尻が隠れるほど長い、淡いブルーのシャツブラウスを羽織ることに決めた。これに少しヒールのあるパンプスを履くと、小柄なあゆみもスツキリとして背が高く見える。気のせいかもしれないけど……。

午後三時に待ち合わせをして、その上平日なのに、中華街は混んでいた。お喋りをしながら歩く人、物を食べながら行く人、急いでいる人は一人もいない。湯気の上った中華まんじゅうのお店に人だかりがしている。

「この饅頭は旨いというんで評判なんですよ」

中華料理の素材を売っているお店には焼き豚がぶら下がっている。ビーズの刺繍のある安っぽい服がぶら下がり、布製の靴が台の上にならべられたお店では、縦じまのポールを半分切ったような帽子も置いてあった。中華菓子の土産物屋も覗いてみる。見ているだけでウキウキする。

「この先に飲茶の旨い店があるんですよ」

遅い昼食をとろうと約束してあった。

店の中に入ると、紙谷さんが先に立ってテーブルまで行き、あゆみの為に細長い背もたれの椅子を引いてくれた。あゆみは特別の人になったような気になる。

紙谷さんは、知的で落ち着いた感じがして自ら気の利いたことをするようには見えなかったけど、あゆみが嫌いなものはないというと、何種類かの点心を上手に選んで、紹興酒と一緒に注文してくれた。

何もかもが夢のようだった。

食事が終わると、山下公園から港の見える丘公園まで腕を組んで歩いた。紙谷さんは背が高いので、キスをする時には膝を曲げていた。

何でこんなこと憶えているのだろう。ホテルにも行った。

うっそー！

翌日、起き抜けに、お掃除もしないで居間に座り込み、昨日のことを思い出していた。しあわせ！

これまで後先のことを考えないで自分の思い通りに行動したことってあっただろうか。小さい時からずっと良い子だったような気がする。父が寝たきりになり、父を見送ってからは母との二人暮らし。その頃母は年老いてあゆみを頼

りにしていた。けっこう重かったのに、その生活が母にとっても自分にとっても一番幸せな事なのだとか心に言い聞かせてきたのだった。自分に嘘をついて無理して……。神棚に向かつて

「ここまで生きてきたんだもの、もう何でもありよね」と思った。

そして、今迄とは全く違う日々が始まった。携帯をいつもポケットに入れて、送ったり送られたり……。携帯そのものが紙谷さんに思えた。やり取りをしていない時にも、開いてみて、なんて言ったか、なんて言われたか、何度も読み返した。時々紙谷さんがあゆみの所で食事をした後、泊まっていくようにもなった。

御年六十二、人生の春をやっている。

「結婚しよう」

「だって、奥さまが亡くなって誰とも結婚しないって言っていたじゃない」

「人の気持ちは変わるものなのだよ」

そんな戯言を言っているうちに、ほんとうに機が熟して来たようだ。だんだん話が具体的になる。

紙谷さんは、商事会社に勤めていたそうだが、今は退職して年金暮らしをしている。企業年金もあるので贅沢さえしなければ暮らして行けるそうだ。ほぼ毎日ボランティア活動をしているけど、作ろうと思えば自由に時間が出来るので、君ともこうして自由に会えるのだとも言っていた。

それでも、あまりお金持ちではないらしい。逢う時はほとんど家に来て一緒に食事をする。時々外で食事をする時も、大抵あゆみが支払っている。それは紙谷さんの所為ではなく、こちらから「私が」、と言ってしまいうからそうなるのだけだ……。

紙谷さんの家には行った事がないので、どんな暮らしをしているのかわからない。お洒落な人なのでいつもセンスの良い服を着ているし、シャツなどはクリーニングに出しているものを着ている。

あゆみは、何も結婚という形を取らなくても、このままで良いのには思っけど、毎日一緒にいられたらもつといいとも思う。

「あゆみの家売って、僕と一緒に住もう」

「あなたの家に行った事がないのですもの」

「僕の家は、前にも言ったけど横浜の中華街の近くの二DKのマンションだけど、賃貸なんだ。身のまわりのせい肉を落として、なるべくシンプルな生き方をしたいんでね。だから君と結婚したら、二人で気に入った場所に気に入った

部屋を見つけて住めばいいと思うよ」

やっぱり紙谷さんは素敵な人だと思う。きっと欲がないのよね。ますます紙谷さんが好きになるけど、この家を離れる決心はなかなかつかない。

「家売らないで、ここで一緒に暮らすのはどうお」

「こんな贅沢な家は僕にはむかないよ」

「ちつとも贅沢じゃないわよ。ここは元は物置だったのを改造したのよ」

「こんなに大きな物置がある暮らしをしていたってことだろう。僕ならもっと謙虚に生きていきたいって思うよ」

私って謙虚じゃないのかしら、あゆみは悲しくなる。自分は何もわかっていないのかも知れない。彼はこの家を売ったお金を、少しでも困っている人の為に使うべきだと思っているのかしら。紙谷さんに最初に会った時、この人は他の人に無いものを持っている。きっと崇高な人なのだろうな、と思ったけど、ますますそう思えてきた。

今まで何不自由無く暮らして来られたのだから、私も人生に恩返しをするべきなのかしら。

あゆみは久しぶりに神棚を見たら、蜃気楼のようにゆらつと揺れたような気がした。こんなに悩むのは欲が深いからかしら。家を売る前に住む所を捜さないと……。あゆみは「まず動きださなければ」と思った。これからは、自分のやりたいことをやるって決めたんだもの。

やはり住み慣れた所が良い、あまり遠くない所を捜して見よう。出来れば近くに大きな公園があると、美術館や博物館に行きやすい所が良いわ。交通の便も大事だし……。インターネットとにらめっこをして探したら、代々木上原によさそうな物件があった。

紙谷さんを誘って見学に行ってみようと思いついて、早速携帯にメールを入れたら、急にボランティアの海外活動で、しばらくマレーシアに行くことになったので、マンションの方はあゆみ一人で見学をして欲しい、と返事が返って来た。

一人で行って見ると、十二階建てのマンションでメンテナンスがとても良いし、セキュリティもしっかりしている。家賃は月十七万円。管理費を入れると年間二百万程度という事だった。あゆみはとても気に入った。紙谷さんと二人なら、一人、年間百万円ずつ払うことになるけど、一軒家の維持費を考えるとまあ、妥当な金額かなと思う。家に帰るとすぐに紙谷さんの携帯にメールを送ったら「いいと思うけど、僕がマレーシアから帰るまで契約は待って！」という

返事が返って来た。

自分で決めた所に住めるのならここを売ってもいいかな。

「この家を売りたいのだけど、母屋を売った不動産屋さんを教えて」

兄の雄大に早速電話を試してみた。

「ケアハウスにでも入るのか」

「そうじゃなくて、私、結婚するのよ」

「ふぁー、何だよ、そんな奴いたのか」

「まあね」

「どんな奴なんだよ、俺の知っている奴か」

「うーん。ほら、お母さんが亡くなった時、お悔やみに見えた紙谷さんっていいでしょう、あの人なの」

「えー、ちよつと待てよ、詐欺の仲間だとか言っていたじゃないか、大丈夫なのか」

「あれは思い違いだったみたい。とつても誠実な人なのよ」

「調べてみるから、ちよつと待てよ」

「そんな失礼な！」

「少しも待てないって事もないのだろう、結果が出るまでは売るなよ」

雄大はそう言って、あゆみから紙谷しげる氏の住所や元の勤め先など、こまごまと聞いて電話を切った。

その夜、紙谷さんから電話があった。

「あゆみ、家は本当に売るのがいい」

「売るつもりではいるのだけど、まだ何もししていないのよ」

「そう、今、マレーシアにいるのだけど、三百万円都合がつかないかな。現地で学校を造ったのだけど、もっと広げる必要があるんだ。ボランティア頼みなのだけど、なかなか寄付が集まらなくて、現地からの SOS で僕が来たんだけど、実情はひどいんだよ。困ったなあ」

「家を売らなくても、三百万なら何とかなるわ。すぐに振り込むから振込先を教えて」

「わー、助かるよ、ありがとう。でもこちらに振り込むのはとても厄介なのだよ。そうだ、ボランティア団体のサポーターが、二三日内にこちらに向かう事になっているから、その人に取りに行ってもらうことにするから、渡してくれないかなー」

「ええー、大使館にお願いしたら何とかならないの」

「それが、大使館とは意見が違ってね、もうこれ以上のことをする必要はないって言うのだよ。現場も知らないくせに……。現地の人たちにやらせればいいって考えなんだ。そんなこと無理に決まっているじゃないか。まだ軌道に乗っていないんだよ。彼らは貧しいんだ、出来るわけないだろう。だから、頼むよ。あゆみが騙された詐欺とは全く違うんだから、僕を信用してくれよ」

「わかったわ。その人が来たらお金を渡せばいいのね」

紙谷さんの熱い思いが伝わって来て、やっぱり彼は崇高な精神の持ち主なのだと思う。でも、少し経つと、やっぱり私、騙されているのではないかしら、と疑心暗鬼になる。

神棚に目が向くが、何にも応えてくれない。当り前よね。

あゆみはサポーターの前田さんという人に三百万円を渡した。紙谷さんを信じたかった。一週間もしないうちに紙谷さんから

「ありがとう。お金が届いたよ。助かったよ」と明るい声で電話があった。

良かった。と思う傍から「大丈夫なのか？」と言った雄大の声がよみがえる。

それでもあゆみは、朝六時に起きて、トイレと玄関と庭の掃除をする。そうすると気持ちが落ち着いて、又一日が過ぎて行く。

雄大が銀行を通して調べてくれた紙谷しげるさんの身元調査の結果が出た。

「すごい人だな」これが雄大の感想だった。

「○△商事に勤めていた彼は、仕事柄、後進国に行くことが多くて、そこで貧困や環境の劣悪さを知り、教育の大切さを痛感したらしいよ。奥さんが……。とても良い奥さんだったらしいんだけど、定年退職になるのを待っていたように亡くなったそう。余程堪えたのだろうな、子供もいなかった。その後の人生をボランティアに捧げることにしたそう。

自分の家も売り払って人助けに当てているみたいだよ。立派な人間には違いないけど、あゆみには無理だよ。あゆみが惚れているのだったら、結婚はしないで付き合うだけにしておいた方が良く思うよ。よく考えて決めればいい」

一か月後に、紙谷さんから今羽田に着いたから、これから行ってもいいかという電話があった。あゆみは涙が出る程嬉しかった。

その日も暑い日だった。ビールを冷やし、お刺身をスーパーで買って来て、

肉じゃがや生ハムのサラダを作った。そして部屋をクーラーで冷やして、散らかっている所はないかしらと点検し……。何しろそわそわとして椅子に落ち着いてられない。

久しぶりに会った紙谷さんは、ずいぶん痩せていたが、日焼けして元気そうだった。玄關に入った途端、必死で抱きついたあゆみを紙谷さんはしっかりと受け止めて「どうしたの、たった一カ月しかたっていないのに」と笑った。

あゆみは嬉しくて涙が止まらない。

「また、あゆみの大泣きだね」

最初に会った時のことを思い出して笑った。

「やっぱりあゆみは僕と結婚しないでずつとこの家にいた方が良いみたいだね」

さんざん食べて飲んで、一段落した時に紙谷さんが言った。

「どうして？ ここを売った後の住む家も見つけたのに……」

「あゆみが見つけたのはとっても贅沢な所なのだよ。此の家よりもっと贅沢なくらいだ。君にはこんな暮らしが合っていて必要なだとわかったよ」

兄も同じようなことを言っていた。

「じゃあ、もう会えないの」

「そんなことはないさ。僕は年から年中外国の僻地に行っているけど、日本にいる時にはいつでも会えるさ」

あゆみは思わず神棚を見た。これが本当は私が一番望んでいた事なのよね。いくら紙谷さんを愛していても不安でいっぱいだったもの。又無理をして、自分を騙して、彼を愛しているのだから何があっても結婚しなければ、とか、彼を愛しているのだから尽くさなきゃとか、思い込もうとしていたのよね。

「ありがとう神様」。神棚に向かって心の中でつぶやいた。

了